# 新版歌祭文　野崎村

## 【解説とみどころ】

近松半二作。安永九年(1780)九月、大坂・竹本座で人形浄瑠璃として初演され、天明五年(1785)大坂・中の芝居で初歌舞伎化されました。

「歌祭文」とは、その当時流行した世俗的な物語を三味線で弾き語る芸能で、『新版歌祭文』は、その中で人々に知られた有名なお染久松の心中事件を題材にした作品です。上下二段全四場の世話物狂言で、『野崎村』はその上の巻の下にあたり、お染久松の死の覚悟を察知した久松の許嫁、お光が二人の命を救うため、祝言を諦めて尼になるという悲劇をクライマックスに構成されており、作品の中心的な一幕として高い評価を受け、現在でも頻繁に上演されています。

在所育ちのお光の哀れな自己犠牲や実直な久作の心のこもった意見事、さらには幕切れの見事な三味線の演奏など見どころの多い作品です。またお染は商家の娘ですが、この作品に限り時代物のお姫様のように袂を使う振りが許されている役なので、通常の町娘のクドキとは異なり、全身で思いの様を表すお染のクドキも見逃せません。

また、二人の仲が認められ店へ戻ることが許されると、盆回しで舞台が半回転し（盆機構がない場合は舞台装置を半回転)、家の裏の船付の土手へと転換され、お染が船で、久松は駕籠で別々に去っていく場面も歌舞伎独自の技巧を取り入れた演出の妙味で見どころのひとつです。

そして幕切れは、華やかな曲に乗って去っていく二人を見送った後、必死にこらえていたお光が久作に取りすがって泣き崩れるという情感あふれる感動的な場面となります。

今回は久作に、本格派で歌舞伎の名手である坂東三津五郎、お光に次代を担うスター、尾上菊之助が共に初役で挑みます。

## 【あらすじ】

大坂の油屋へ奉公に出ている久松は、悪人に店の金をだまし取られた不始末で養父である野崎村の久作の家に戻され帰って来ています。久作は女房の連れ子のお光と久松の祝言を決め、お光は日頃の願いが叶ったと喜びます。しかし久松は油屋の娘お染と恋仲で、お染は久松の子を身籠もっています。一方のお染も家の借金のため質屋山家屋佐四郎へ嫁入りすることになっており、結納の品としてすでに刀を申し受けていたのでした。しかもこの刀は元武士である久松が探しているお家再興に必要な刀なのでした。

舞台はこうした状況下から始まります。

野崎村に住む百姓久作の家。娘ざかりのお光は後妻の連れ子で器量も気だてもよく、病の母の看病もよくすると近所でも評判の娘でした。久作にはお光と兄妹同様に育てた久松という養子もおり、末は二人を夫婦にすることにしていましたが、今日思いがけず久松が奉公先から戻ってきたので、久作は今宵二人を祝言させると言い出します。思いが叶い喜ぶお光は、祝い膳を作りながらも急な話で心が落ち着きません。

そこへ在所では見かけない美しい町娘が久松を訪ねてきます。お光はこの娘が久松の奉公先である油屋の娘お染だと直感します。お光は今宵の祝言を前にお染に出られては久松の心が動揺すると思い、意地悪くお染を追い帰そうと締め出してしまいます。

久作は心の晴れぬ久松に縁先で肩を揉ませ、お光にお灸を据えさせます。お染が門口を開けて合図を送ると久松もようやく気が付きますが、親の手前、慌てて「覗くは悪い。折が悪い」などと取りつくろいます。お光はそんな久松に嫉妬し、つい、いつにない調子で久松と言い争いになります。その様子から久作はお染に気付き、お光を無理やり奥へと連れて行きます。

その間ももどかしく駆け込んでくるお染。久松は店を出る際、山家屋との縁談を勧める書置をお染に残してきたのですが、お染は諦めきれず野崎詣りと偽って久松を追ってきたのでした。大店の一人娘と一介の奉公人では所詮叶わぬ恋と諦めている久松は心を鬼にして、お染は母への孝行、自分は恩のある店への義理のために二人は別れるべきだと諭します。しかしお染は、山家屋へ嫁に行くくらいなら死んだほうがましだと思い詰め、隠し持っていた剃刀を手にするので、久松もそんなお染の一途な思いに心を動かされ、一緒に死のうと覚悟を決めます。

奥で様子を聞いていた久作は二人を制し、久松の素性を明かします。久松は和泉の国、石津家の家臣相良丈太夫の息子でれっきとした武家の生まれですが、お家没落後、乳母だった妹に代わって久作が十歳まで育てたのでした。知恵づけのため奉公させ人並みに成人したのも油屋のお蔭で、その恩も義理も忘れてお店の娘御をそそのかし、辛抱して待っていた許嫁を嫌い、身上の良い油屋の婿になるのは欲深く、人の道に外れる。久松が悪人に店の金をだまし取られ濡れ衣を着せられた時、なけなしの金を出して救ったのも、お主への忠義ゆえだと、久松の了見違いを諭します。この諫めにお染も久松も得心し、別れることを約束します。

お光の母は明日をも知れぬ重病で命あるうちに娘の祝言をして喜ばせてやりたいと、久作はお光を呼び出します。ところが綿帽子姿のお光は、すでに髪を剃り落とし袈裟を身にまとった尼となっていました。三人はその姿に驚きますが、利発なお光はお染と久松は死ぬ覚悟と見抜いたので、末期の近い母へは祝言したと偽り、自から身を引き進んで尼になったといじらしく語ります。義理と情けと恩愛に絡まれ４人は涙します。

この様子を門口で聞いていた油屋の後家お常は、久作の心ある計らいとお光のけなげな志に感謝し、病人への見舞いにと差し出した箱の中には、久作が立て替えた金が入ってありました。久松の言訳も立ったので店へ戻ることを許し、二人の仲も認めて春を待つように言い聞かします。喜び合う二人でしたが、世間の手前もあるのでお染は母とともに船で、久松は駕籠でと別々に帰ることにします。

お光は裏の土手から久松の乗った駕籠をいつまでもいつまでも見送ります。皆の手前、気丈に振舞っていたお光でしたが、久松たちが見えなくなると心の張りが切れ、誰にはばかることなく父の胸に泣き崩れます。久松への恋心は、容易く断ち切ることは出来ませんでした。

# 江島生島

## 【解説とみどころ】

大正二年、歌舞伎座で初演された新作舞踊の代表的なひとつ。
生島新五郎は初代市川團十郎死後、江戸の歌舞伎界を背負って立った人気役者で、少年だった二代目團十郎を初代亡き後、そばにおいて育てたのも新五郎でした。
一方、江島は権勢を誇る江戸城大奥の中臈でした。正徳四年（一七一四)、芝増上寺の代参の帰り、江島が新五郎の出演した山村座をのぞいたことが発覚、江島は信州高遠へ、新五郎は三宅島に流された上、山村座は廃絶させられたという、実話をもとに歌舞伎化されました。
江戸城大奥の中臈・江島と人気歌舞伎役者・生島新五郎の禁断の恋を劇化した新作舞踊です。
世間ではセンセーショナルな話題となりましたが､直接的に徳川と関わりがあるため江戸時代には全く劇化されず、明治になって黙阿弥などが題材を扱うようになりました。中でも今日、多く上演されるのが本作です。
第一景は生島の見た夢の場。桜の散る春の夜、池に舟を浮かべて楽しむ江島と新五郎の二人。盃事などのむつまじい振りがあった後、江島の姿が消える。
第二景は流罪となった新五郎が目覚めて悄然と立っている｡江島の面影を負う新五郎に旅商人がからみ、海女たちもやって来て新五郎をからかう。やがて雨が降り出し、新五郎は一人さまよい歩く…。
今回は生島新五郎に坂東三津五郎、江島に尾上菊之助が共に初役で挑みます。

## 【あらすじ】

夜桜に誘われて漕ぎ出した舟が一隻。棹を差しているのは、江戸城大奥で権勢を誇る中臈の江島（菊之助)。その傍らには今を時めく人気歌舞伎役者の生島新五郎（三津五郎)。ご法度と知りながら激しい恋に身を焦がした二人である。
新五郎は小鼓を打ち興じている、
二人は春の夜景を眺め、なまめいた春の宵に酔っていたが、やがて江島は生島の手を取って岸におり立つ。
二人は心を時めかして逢瀬を重ねていた頃を思い浮かべ、盃を交わす。
と、そこへ聞こえてきた舟歌は､「島もなあ、鳥も通わぬ八丈が島へ…」物悲しい調べである。生島は思わず手にした盃を落とし、おののく。二人の仲を引き裂かれたあの時―生島の胸にその様がまざまざと甦り悲しみにうちしおれる。江島は悄然と立ち上がり、留める生島を振り払うと消え去ってしまう。
これはみんな、夢であった。今では三宅島へ流人となった生島は、江島を恋い慕うあまり、心を狂わせてしまった。髪も乱れ、しどけない姿で呆然と空を見上げていたが、江島の面影が忘れがたく、幻を追ってゆく。
そこへ小間物売りの旅商人が来かかる。旅商人は、この美しい男が物狂いと知って気の毒には思うのだが、厄介なものにかかわったとばかり、遠ざけようとする。

　そのあとに、島の海女が四人、賑やかに連れだってくる。そこで生島の姿を見つけると、今日もまたからかってやろうと駆け寄ってくる。その中で一番美しい海女（菊之助）を、生島はいつも江島と思い込んで幻想の世界に浸り、海女に戯れかけてくる。それを海女たちは面白がる。今日は、旅商人の荷から小袖を出して生島に着せかけ、囃し立てる。すると生島はすっかりその気になって、美しい海女を相手に小袖を着せかけ、喜んだり、嘆き悲しんだり…。
　そんな戯れに、やがて飽きた海女たちは、生島を振り払って帰っていく。倒れ伏している生島に、春の雨がしとしとと降り注ぐ。旅商人が菅笠をかざしてやると、突然傘を奪って狂い始める。そして、「江島恋いしや」とつぶやいて、小袖を引きずりながら、江島の面影を追って去っていく。